

<http://1000gen.com>

津屋崎の四季

初めて暮らした春夏秋<2010>



頒布価格 500 円



津屋崎ってどんなところ？

福岡市と北九州市のちょうど中間にある人口5万6千人ほどの小さな市、福津市。ここは2005年に福岡町と津屋崎町が合併して誕生した市です。

旧福岡町にはJR鹿兒島本線の福岡駅があり、駅を中心としたベッドタウンが広がる一方、旧津屋崎町の周辺は福岡都心部から至近にもかかわらず、ウミガメが産卵する美しい砂浜やカブトガニが生息する干潟がある非常に自然の豊かな場所です。

こんな、自然豊かな津屋崎のもう1つの顔。それは、「津屋崎千軒」と呼ばれる一帯です。

津屋崎千軒は、かつて栄えた津屋崎漁港近くの一帯を指します。明治初期まで九州で有数の塩田が広がり、五十集舟いそほふねと呼ばれる廻船が東は瀬戸内、西は長崎に至るまで行き来して、塩を輸出し、各地の名産品を輸入する商港として栄えていました。

「千軒」とはたくさんの家が軒を連ねていた事を指すもので大変栄えていた事が偲ばれます。

失われた町並みもあるものの、現在もその趣きが数多く残されています。



津屋崎 ブランチ



“よそ者、若者、のぼせ者”が津屋崎に実際に移り住み、新しい視点で人と人、土地と人をつなぎ、地域の未来を創りだす事を目的として、2009年9月から活動を開始しました。スタッフは4名。うち3名は市外から移り住み、住民の一員となって活動しています。2010年度に行っている津屋崎千軒プロジェクトの内容は3つ。暮らし目線で津屋崎の情報を市外へと伝えること、移住希望者と地域とを繋げること、そして観光とは違う視点で交流を深めるエデュケーションルーツリズム（学習交流）の実践です。

その活動拠点が「津屋崎ブランチ」。津屋崎千軒内の一角にある一軒家を改築したオフィスでスタッフは働いています。家の中心にある未来会議室では「未来を語る、人を褒める、断定しない」という3ヶ条を守らなくてはなりません。ここには市内外、時には海外からもたくさんの方が訪れ、移住の相談を行ったり、小規模のイベントを開催し交流を深め、人と人とのネットワークを築いています。



目次

活動を始めて1年半。地元の方が“当たり前”に行っている風習や、季節によって異なる風景などを全身で感じてきました。

毎年繰り返される春夏秋冬。2010年もまた同じように繰り返されましたが、それはその年にしかない唯一の出来事でもあります。

そんな、「いつもの、だけど今だけ」のとおきの津屋崎の四季を、まちの皆さんと一緒に冊子にまとめました。

春



5

夏



11



17

秋



23

冬

津屋崎ってどんなところ 1

津屋崎ブランチ 3

夏

「オイサー、オイッサー」
男たちが山を昇き、まち中を巡る頃
突き抜けるような青い空とともに
津屋崎の夏が訪れます。



暑いからこそその工夫が夏の楽しみ——



まわり、くぐり、厄祓い

夏越

波折神社の鳥居の下に大きな茅の輪が据えられると「夏越」が始まる合図。宮司さんを先頭に行列が鳥居を8の字の様に回り、この夏の無病息災を願います。最後に輪は小さな輪に作り直され、各家の玄関に据えられます。



夏の夕暮れの楽しみ

夕釣り

夕暮れ時の堤防に並ぶ人影。長い夏の一日は、夕釣りで終わります。オレンジ色の海に釣り糸を垂らして、狙うはハゼ、メゴチ、キスなど。ちなみにまちのお坊さんは「殺生御免」と塩をまいてから釣りをするとか。



夏の夕暮れの贅沢

夕方海水浴

「青い空、青い海」は見るだけが一番！地元の人々は夕方、オレンジの空と海に入るので。浮力に身を任せてぷかぷかしていると、浜で野球をしている少年たちの歓声が聞こえてきました。凧の津屋崎の、豊かな時間です。



工夫次第で乗り切れる

クーラーに頼らない夏

窓には簾と風鈴。朝一番から打ち水をして、いただきもののレトロ扇風機をぶんぶん回し、それでもダメならシャワーで汗を流す！津屋崎の夏は、クーラーに頼らずに暑さを乗り切りたくなるから不思議です。

津屋崎祇園山笠

三百年続く津屋崎の心意気



水法被、締め込み姿の男たちが「オイサ、オイッサー」の掛け声とともに山笠を担ぎ、津屋崎千軒の路地を駆け抜ける祇園山笠。約300年の歴史のある祭です。地元の人に初めて山笠に参加したときの思い出を聞くと皆「覚えていない」と答えます。それもそのはず、物心つく前から父親に手を引かれて参加していたのですから。

津屋崎には「北流」、「岡流」、「新町流」の三つの組織があり、2009年秋に移住してきた私は「北流」の一員として初めて参加しました。7月19日に近い日曜日がクライマックスの「追い山」。各本拠地から波折神社に奉納する「宮入れ」と、神社から飛び出して行く「宮出し」が花形です。

その日担ぐのは約5km。絶えず担ぎ手が交代するとはいえ、全員が力を出し切らないと山小屋までは辿り着けません。山小屋に帰り着き、全員で歌った『祝いめでた』は、男を「山のぼせ」にするだけの充実感に溢れていました。全てが終わり、山笠を解体していると誰となくこう呟きます。「もう夏の終わったごたるね」。まだ8月にもなっていないというのに。でも一度でも山笠に参加した人には、その意味がよくわかるのでした。

木村 航



津屋崎祇園山笠

正徳4年(1714)博多の櫛田神社から祇園宮を勧請したことに起源をもつ伝統行事。戦後一時中断していたが昭和50年保存会により復活を遂げ、現在に至る。3つの「流」の山を波折神社に奉納し、再び津屋崎千軒のまちへ駆け出ることを「追い山」といい、祭のクライマックスとなる。

山笠は7月半ばの「追い山」だけではありません。7月1日の「棒洗い」から約3週間、男性たちは週末ごとに集まって準備を進めていきます。その間彼らにおにぎりを振る舞うのは女性の仕事。3つの「流」それぞれに奥さんたちが炊き出しを行います。「追い山」の後の「なおらい(直会)」という打ち上げまで彼女たちの手は休むことがありません。そんな女性たちを、まちの人は敬意を込めて「ごりょんさん」と呼びます。

7月になれば男性はずっと留守。山笠の全体を統括する「津屋崎山笠保存会」の役員ともなれば年明け早々から会合へ出て行きます。留守中の家を守り、家事の一切を仕切るのもごりょんさんの仕事なのです。「男性は幸せですよ」とあるごりょんさんは肉肉を込めて言いますが、その表情からは男の祭を自分が支えているという意気込みを感じました。

そんなごりょんさんの活躍を、男たちは知らないわけはありません。山笠が全て終わった後、水法被姿の男性が、自分が所属する「流」の女性たちに「今年も自分たちが山笠に打ち込めたのも、姐さんたちのお陰です」と頭を下げたそうです。支える女性と感謝する男性。300年の山笠の歴史はそんな男性と女性の関係も伝えているのでした。

木村 航



ごりょんさん

男の祭りを支える女たち



ごりょんさん

さかのぼれば貴族の女性に対する呼び名「御寮(ごりょう)」を語源に持つ「ごりょんさん」という言葉。今でも商家のおかみさんに対する呼び名として西日本一帯で使われています。博多やここ津屋崎では山笠を支える女性という意味が際立っているようです。